

最新事情

学校生活の全ての場を
マナーと行動力育成の場として生かす

岡山県立津山商業高等学校

(岡山県津山市)

岡山県立津山商業高等学校は2021年に創立100周年を迎える、県北部の伝統校である。生徒たちは1年次は商業科で、2年次以降は情報ビジネス科と地域ビジネス科に分かれて学ぶ。進学者が6割近くだというが、いずれ社会に出る日を見越して、日頃の学校生活の中であいさつや授業に臨む姿勢などを徹底している。地域社会と協力して生徒を育てる同校の取り組みについて伺った。

課外の活動で 実践力を伸ばす

岡山県立津山商業高等学校では、毎年11月の第4土曜日に販売実習「津商モール」を開催している。今年も第10回。生徒の家族だけでなく、卒業生や地元の人々が大勢訪れ、一大イベントとしての活況を見せる。モールに見立てた体育館では2・3年生8クラスで16店舗、1年生の希望者で2店舗を運営しており、そこで売られているのは家電や花、野菜、海産物、菓子やおもちゃなどさまざま。早々と売り切れるブースもある。地元中学校からも毎年20名程度が販売の体験に訪れており、ここから津山商に入学する生徒もいるそうだ。



[右] 津商モール前日の全体準備のお辞儀の仕方をおさらい

[下] 当日は、保護者や近隣の人々が大勢訪れる。呼び込みをする生徒たちの声が体育館に響く

[左] 同時開催の「キッズビジネスタウンつやま」(商工会議所青年部主催)では1年生が小学生の誘導などを担当

校内で同時開催の「キッズビジネスタウンつやま」は商工会議所青年部の主催で、津山市内のさまざまな店のほか、銀行と税務署、ハローワークもブースを構える。仕事を探して働き、報酬を受領したらそこから税金を支払うという一連の流れを、地元の小学生に体験してもらう取り組みであり、津山商の1年生が誘導などを担当している。

このような取り組みの目的を、石下義久校長は「生徒たちが地域で学び、地域で育つためのもの」と強調する。



[上] 毎年11月に開催される津商モール
[右] 今年の「社長」(左)と「副社長」



石下義久校長



「私も赴任してきて実感したのですが、岡山県北部は特に人と人とのつながりを大切にしている土地柄。その意識を生徒たちもしっかりと受け継いでいます。性格的には少し恥ずかしがりやの面もありますが、学校の外の社会に目を向けるきっかけになる取り組み・仕組みを作っていくことで生徒の力を伸ばしていきたい。『津商モール』もその一つなのです。」

商業科の専門科目だけでなく、「津商モール」をはじめとする課外の特別活動や「ホームルームでの話し合い活動」は、互いの意見を尊重しながら連携し、合意形成に至ることの大切さを学ぶよい機会だと石下校長は説明する。

2年前からは、津山市内の四つの公立高校が連携する「地域創生学」を開講している。教育内容も特長も異なる四校の生徒（希望者のみ）が、共に地域の課題などを見出すフィールドワークをし、その成果を発表、最終的に津山市への提言を行うというものだ。

「社会との接点を持たせ、学校で学ぶのはいざれそこで培ったものを社会に生かすためだということを体験させる取り組みです」（石下校長）。

まだ始まったばかりだが、地域を舞台に生徒の力を伸ばす仕掛けの一つとして、今後一層注力していくという。

マナーは社会人の基礎 3年間でしっかり修得させる

同校では学校生活全般において、マナー意識の醸成、マナーの修得を重視している。

「一人きりでいるならマナーなど必要ありませんが、人間が二人以上になれば社会ができます。そこでお互いに気持ちよく過ごせるようにすることは大切なことです。生徒には、いざれ出ていく社会で求められるきちんとしたマナーの基礎をぜひ在学中に身に付けてもらいたい。あいさつは当然ですが、心配りが大事。心配りとは、相手を認め、〈他人と自分〉さらに〈公と私〉の区別ができてこそ可能になるからです」（石下校長）。

全クラスに掲示する「津商授業マナー」には、服装、姿勢、お辞儀など授業中に生徒が心掛けるべき態度が明確に示されている。商業科以外の教員にも、生徒への指導ポイントが分かりやすいと好評だ。

毎日のあらゆる授業が、マナー意識を向上させる場。同校でマナー科目を担当する名和晋也先生は、「授業は6時間目までありますから、一日に最低でも6回は、服装や姿勢、あいさつなどに意識を向けることとなります。その積み重ねが、日々生徒のマナー向上につながると思っています」と話す。3年生の生徒に進学や就職の面接指導をしていると、それまでの蓄積が実を結び、しっかりとマナーが身に付いているこ

とを感じるのだという。

マナーやコミュニケーションについて指導する科目は幾つかある。1年生「ビジネス基礎」の一部の項目ではお辞儀や姿勢、ペアワークでの話し方の練習を行う。また2年生地域ビジネス科の選択科目「ビジネス実務」では「オフィス実務」の項目で電話応対や来客応対のロールプレイングも取り入れている。

そして3年生の「課題研究『ビジネスマナー・秘書』」は、秘書検定2級合格を目標にした、よりマナーに特化した授業である。「秘書検定には、社会人として分かっておきたい一番の基礎が示されており、生徒たちに社会人としての自覚を持たせるために役立っています」と名和先生。毎年30〜40名が受講しており、6月に2級を受験。11月には引き続き2級と、希望者は準1級に挑戦している。

授業では、各自問題を解かせ、一人ずつどのように考えたのかを発表させる。なぜその選択肢の行動は適切なのか、他の選択肢はそれぞれどこが違うのか、どこに注意して考えたのか。秘書A子を自分に置き換え、生徒は自分が働く



全クラスに張り出し、全科目で徹底する「津商授業マナー」。社会人としてのマナーも原点はここにある

マナー科目を担当する名和晋也先生



秘書検定2級に合格し、準1級にもチャレンジした3年生。(後列左から) 地域ビジネス科の富倉菜穂さん、情報ビジネス科の川上遥さん、(前列左から) 情報ビジネス科の小山知夏さん、横部早紀さん、大賀真琴さん

身に付けて磨いたマナーを 将来に生かす

姿を想像しながら考えていく。「できれば準1級まで目指してほしいですが、一問ずつ丁寧に進めることで考える力が身に付きますから、2級の学習だけでも十分意識は変わります」と名和先生。「津商モジュール」やその他の特別活動、ボランティアや職業体験などの校外活動でも、生徒が「お客さまの目線」に立って行動できるようにしつつある。地道にマナーを指導してきた成果が生徒の態度やしぐさに表れるのを見ることは、先生方にとって何よりもうれしいことなのだ。

生徒たちは自分たちの成長をどのように捉えているだろうか。

秘書検定2級に合格し、準1級にもチャレンジした

3年生、地域ビジネス科の富倉菜穂さん、情報ビジネス科の川上遥さん、小山知夏さん、横部早紀さん、大賀真琴さんの5名に話を聞いた。入学前から津山商でビジネスマナーを学ぶことを一番の目標にしていたという富倉さんは、

「問題の中では、職場でのコミュニケーションに関する問題が特に印象に残りました。どんなコミュニケーションの取り方をすれば人間関係が円滑になるのか、問題からさまざまに学べたのでそれを将来生かしていきたいです」。

川上さんは、卒業後は就職が決まっている。「敬語を学べたことが一番よかったです。就職したら私が一番下の立場。上司や先輩にきちんとした言葉遣いをするのが大切だと思えます。普段使わないような難しい言葉遣いや手紙に使う用語なども学べたので、お礼状の作成などに生かせそうです」。

小山さんは、「最初は秘書の仕事に興味があったのですが、問題集を解いてみると、秘書にかかわらず、どんな仕事にも必要な行動や考え方であると思いました。秘書検定合格という肩書だけでなく、将来社会に出たときには、きちんと実践できるように一つ一つ考えながら行動できるようにしたいと思っています」。

横部さんも卒業後は就職。来客応対のときの言葉遣いや上司が不在のときの対応などについて、理解を深めながら勉強したことが将来役に立ちそうだと話す。「まだ不安ですが、就職までにもう一度問題集を振り返って、自信を持って

応対できるようにしたいです」。

大賀さんも卒業後は就職する。今は、秘書検定で勉強したことをどう使っていけばよいか考えながら、先生方や社会人の振る舞いを見ていくという。「問題で見たからできるとはまだ言えませんが、知っていることが出てくるとうれい。まだ実践したことはないのですが、春からどうやって実践するか、よく考えていきたい。確信を持ってできるようになりたいです」。

皆さんに難しかったことを尋ねてみると「社会人としての振る舞いや現場の様子が分からず、問題を解いていてもどういう意味だろう、どうしたらいいんだろうと迷うところが多かった」「知識が足りないせいか、記述問題でうまく答えられなかった」「冠婚葬祭のマナーは、今まで自分で経験したことがなかったので、慶事・弔事の場合のマナーや表書きなど戸惑うことが多かった」と、まだまだ勉強が必要だと感じている様子。

5名の生徒は、しっかりと自分自身の言葉で、体験を語ってくれた。進路はさまざまだが、ここで学んだマナーを忘れず、磨いていきたいという意欲が伝わってくる。

「学校で学んだことを地域で実践し、そこで学んだことをさらに学校で深め、将来、地域に還元する。きちんとこのサイクルができるよう教育することがわれわれの目標」と石下校長。

津山商での学びを地域や社会で生かしてくれる日を、先生方は心待ちにしている。